

【資料紹介】

沖縄県立芸術大学附属芸術資料館所蔵楽器の 新情報および新規追加資料

長嶺 亮子

沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館が平成10年に刊行した『所蔵楽器図録』には47点の楽器が掲載されており、これらは当時の開講科目「民族音楽学研究」の受講学生を中心に整理された(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館1998:2)。今回、同館学芸員の翁長邦子氏とともに所蔵楽器資料の再整理を行ったが、その結果、前掲の図録作成時には分からなかった情報が得られたほか、以前の図録から掲載が漏れていた楽器が新たに数点確認された。本稿では、新たに見つかった楽器資料を紹介するとともに、すでに所蔵が確認されていた楽器に関する新しい情報を一部報告する。

新たに見つかった楽器

今回新たに見つかったのは、プーンギー(インド)、タシャ(インド)、尺八(日本)、龍笛(中国)、月琴(中国)の楽器5点で、また楽器ではないが虚無僧が持つ「偈箱^{げぼこ}」もあった。

納められていた箱のメモ書きによれば、これらはいずれも音楽学者の吉川英史(1909-2006)の寄贈物のようなものである。ただし、本大学への寄贈の経緯や吉川自身がこれらの楽器を入手した詳細は、現在のところよくわからない。ただ、吉川の自伝『謝々天庵主人回想録』によれば、吉川は昭和47年に「日印音楽舞踊交流使節団」の一員として、ニューデリー(西北インド)、ボンベイ(現ムンバイ、西インド)、コチン(現コーチ、南インド)、マドラス(現チェンナイ、南インド)を回っている(吉川 1994:392-402)、縦笛のプーンギー(写真1)と陶器製太鼓のタシャ(写真2)は、訪印時に入手したのかもしれない。

尺八(写真3)と偈箱(写真4)は日本の物である。尺八は表四孔、裏一孔の標準的なタイプであり、胴に「志」の銘が記されている。また、偈箱の表面に書

かかれている「明暗教會」の文字から、これが虚無僧尺八愛好家によって京都東福寺の塔頭善慧院内に設立された「明暗教會」のものであることがわかる。ただし、この尺八と偈箱に関する覚え書き等も一切残っておらず、二つの関係は不明である。

龍笛(写真5)と月琴(写真6)は、その形状から見て中国楽器であるが、どちらも江戸末期から明治期に流行した日本の中国系音楽「明清楽」でも用いられる楽器である。吉川が明清楽について、どの程度認識していたかはわからないが、その著書の中でも明清楽について度々取り上げていることから、関心は抱いていたように見受けられる。今回見つかった龍笛は、指孔が六つ、吹口、飾孔が二つ、飾り房を付けた裏孔が一つ、そして吹口と指孔の間に響孔が一つ開いている。響孔は竹皮を貼ってサワリ音を出すための穴で、このビリビリとした音色が明清楽の明笛または清笛の特徴となる。明笛や清笛を「龍笛」と称することもあったので、この龍笛は明清楽の楽器である可能性が高いだろう。なお、龍笛が納められた木箱の蓋には、表面に「□製斑竹龍笛」、裏面に「戌寅第一月初三□□□硯晉玲瓏梅□鄭都偶弓台□□詞幸□之奏一関□□劉亮希を□名笛や 竹□や道く□生」(写真5-2)と記されている(判読不能の文字は□で示した)。今後の解明が待たれる。

月琴は、納められた箱には「阮咸」と記されていた。しかし、棹が短い点や、弦を張った痕跡が複弦の2コースあることから、阮咸ではなく月琴であろう。しかしながら、損傷がひどく、さらに月琴の胴内部に取り付ける「響き線」など部品が一部欠けていた。

以上が、今回新たに資料館収蔵資料として追加する楽器である。寄贈を受けてから年数が経過していることや、当初これらを受け入れたであろう大学附属図書館の新築に伴う混乱などによって寄贈目録などが所在不明で、未だわからない点が多いが、今後も継続して調査が為されることを希望する。

続けて、平成10年の図録刊行以降に新しい情報が確認できた楽器を一部紹介する。

〔ムーンライト〕(写真7)

本大学の『所蔵楽器図録』では月琴として掲載されている。しかし、そのサイズは全長が52.7cmで標準的な月琴よりかなり小さく、また糸倉や糸巻きなど

の形状が明らかに月琴のそれと異なるなど、疑問が少なくなかった。今回、再調査を行った結果、この楽器は大正琴の発明者として知られる森田吾郎¹が昭和6年頃に考案したムーンライトであることが明らかになった²。

ムーンライトに関する先行研究は、残念ながら現在のところほとんど見あたらない。ただ、森田吾郎が発明した楽器について述べた文献に「この楽器 [ムーンライト：筆者注] は中国の阮咸、あるいは月琴を模して作られたのではないかと思われる。三弦のものや四弦のもの、みごとな装飾が施されているものや素朴な作りのもなどその種類はさまざまである」(金子 1995:45-46)とある。また、浜松市楽器博物館による企画展「大正琴の世界」の図録にはムーンライトの写真が掲載されている(浜松市楽器博物館 2008:6)。これらの情報を手がかりに、本大学の該当楽器を比較してみると、全長が50~60cm程度で、弦が三弦張られ(ただし本大学の楽器は糸巻きが一つ欠落)、糸倉と糸巻きの形状がヴァイオリンに似寄りし、指板にフレットが打たれているといった点が、前掲の資料と酷似する。以上から、これまで月琴と登録されていた本大学所蔵楽器を「ムーンライト」と訂正する。本大学のムーンライトは、吉川英史の寄贈資料である。ただし、確認できるかぎりの吉川の著書にはムーンライトに関する話題は取り上げられておらず、吉川自身がどの程度ムーンライトについて把握していたかは不明である。

【明清楽の楊琴】(写真8)

本大学の『所蔵楽器図録』には、13弦古箏と掲載されている。しかし、再調査を進めるなかで、筆者はこの楽器が明清楽楽器の楊琴と形状が似ていることに気がついた。

『風俗画報』104巻に掲載されている清楽楽器の図の楊琴(写真9)は、13弦で柱を備えている。また、東京音楽大学附属民族音楽研究所が所蔵する明清楽楽器(伊福部昭コレクション)の楊琴(写真10)は、柱が欠落しているものの、形状や弦の数が『風俗画報』の楊琴と同様である。筆者は同楽器を直接拝見する機会に恵まれたが、この楽器の全長は120cm程度であった。本大学の「13弦古箏」は、全長117.3cmである。枕角や糸巻き軸などすべての部品が欠損しており、胴のみしか残っていない。しかし、上記の『風俗画報』あるいは東京音大の明清楽楽器と比較してみると、その形状やサイズが酷似していることがわかる。

一方、中国で「古箏」と称されるものは全長が150cm前後で、16弦が一般的である。よって、本大学の「13弦古箏」は明清楽の楊琴の可能性は高いだろう。因みに、明清楽で用いられた「ヨウキン³」には、日本の箏からの変体タイプと、西アジアのカーヌーンに似た台形状でつま弾く陽琴タイプ⁴、また中国の打弦楽器である揚琴(洋琴)タイプなど形や奏法が様々であり(李 2012: 75)、明清楽では時代によって、これらの楽器の使用が異なったようである。

この楽器もまた、吉川英史の寄贈楽器のひとつである。明清楽に対する吉川自身の深い言及は確認できないが、日清戦争以前の日本の音楽状況として「当時の音楽界では、和楽・清楽・洋楽の三種が鼎立していた」(吉川 1965: 360)と述べるなど、度々明清楽について触れている。日本音楽の研究者として、明清楽に少なからず関心を抱いていたのだろう。

市井に普及した月琴や笛を除き、現存する明清楽の楽器が表に出てくることはそれほど多くないようである。本大学の楊琴はまだ推測の段階を脱しないが、調査と検証が進み明清楽の楊琴として正式に判断されれば、学術資料としての意義は大きいだろう。

写真資料

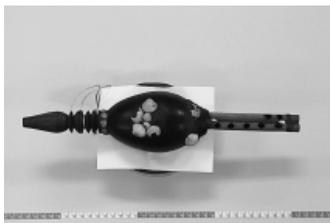


写真1 プーンギー



写真2 タシャ



写真3 尺八

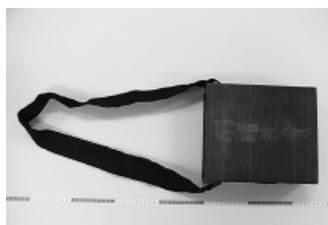


写真4 偈箱



写真5-1 龍笛



写真5-2 龍笛

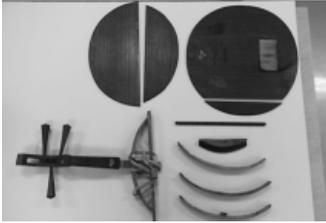


写真6 月琴

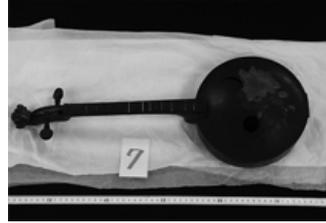


写真7 ムーンライト



写真8 楊琴



写真10 東京音大楊琴



写真9 『風俗画報』

資料 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵楽器一覧

	楽器名	分布地域	寄贈者	備考
1	琉球三線「富盛開鐘」	沖縄	稲嶺盛保	
2	三弦	中国	吉川英史	
3	三絃	中国	吉川英史	
4	阮咸	中国・日本	Brian Todes	
5	秦琴	中国	Brian Todes	
6	ムーンライト	日本	吉川英史	過去図録では月琴
7	琵琶	中国	Brian Todes	
8	ラバープ	アフガニスタンなど	Brian Todes	
9	二胡（八角）	中国	徳山清教	弓付き
10	二胡（六角）	中国	Brian Todes	
11	六弦胡弓	沖縄	又吉俊夫	弓付き
12	ルバープ	インドネシア	Brian Todes	弓付き
13	ゲソゲソ	インドネシア	Brian Todes	弓付き
14	トゥンガ	ネパール	Brian Todes	過去図録ではチカラー
15	サリンダ	北インド	Brian Todes	
16	ラバナハッタン	インド	Brian Todes	
17	サーランギー	インド	Brian Todes	
18	マシニコ	エチオピア	Brian Todes	弓付き
19	クリビ	フィリピン	Brian Todes	
20	一弦琴	日本	吉川英史	台付き
21	八雲琴	日本	Brian Todes	台付き
22	八雲琴	日本	吉川英史	
23	東流二弦琴	日本	吉川英史	
24	二弦琴	日本	吉川英史	台付き
25	楊琴	日本（明清楽）	吉川英史	過去図録では13弦古箏
26	15弦古箏	中国	吉川英史	
27	コムンゴ	韓国・朝鮮	吉川英史	
28	チェレンブン	インドネシア	Brian Todes	
29	カチャピシテール	インドネシア	Brian Todes	
30	揚琴	中国	Brian Todes	

31	尺八 (天吹)	日本	吉川英史	
32	尺八 (天吹)	日本	吉川英史	
33	尺八	日本	吉川英史	
34	尺八	日本	吉川英史	
35	洞簫	中国	吉川英史	下部欠損
36	洞簫 (石)	中国	高丈二	
37	籠笛	日本	吉川英史	
38	篠笛	日本	Brian Todes	
39	みさと笛	日本	吉川英史	
40	みさと笛	日本	吉川英史	
41	みさと笛	日本	吉川英史	
42	サルネ	インドネシア・スマトラ	Brian Todes	
43	タブラ	インド	吉川英史	大小一組
44	ゴング	インドネシア	Brian Todes	
45	キティラン	インドネシア	Brian Todes	
46	プーンギー	インド	吉川英史	新規追加
47	タシャ	インド	吉川英史	新規追加
48	尺八	日本	吉川英史	新規追加
49	籠笛	中国、日本 (明清楽)	吉川英史	新規追加
50	月琴	中国、日本 (明清楽)	吉川英史	新規追加、破損
51	偈箱	日本	吉川英史	新規追加

注

1. 森田吾郎 (1874–1952) 本名は川口仁三郎、別名は川口音海。名古屋市出身。明清楽の明笛や月琴、和楽器の一弦琴などの名手として知られた。大正琴やムーンライトのほかにも数多くの楽器を発明した。
2. 考証にあたり、明清楽器研究家の稲見恵七氏ならびに浜松市楽器博物館よりご助言と資料の提供をいただいた。感謝申し上げます。
3. 明清楽の資料では、「ヨウキン」を「瑤琴」、「楊琴」、「揚琴」、「洋琴」、「陽琴」など同音異字の表記が確認できる。ただし、それぞれの漢字表記によって楽器の形態が統一されているとはいえない。
4. 陽琴もまた、森田吾郎が明治後期に発明した楽器である。

【参考文献・資料】

- 大塚寅藏『明清樂独まなび：新案日本数学符』十字屋楽器部 1909
大橋又太郎編『琴曲独稽古 日用百科全書第5編』博文館 1895
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵楽器図録』沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館 1998
金子敦子『大正琴の世界』社団法人大正琴協会・音楽之友社 1995
川口仁三郎編『陽琴使用法及歌譜』岩田みね 1903
吉川英史『日本音楽の歴史』創元社 1965
吉川英史『謝々天庵主人回想録』邦楽社 1994
東陽堂『風俗画報』104号 1895
浜松市楽器博物館『企画展「大正琴の世界」図録』浜松市楽器博物館 2008
李婧慧『根與路 台湾北管與日本清樂的比較研究』国立台北芸術大学 2012

(ながみね りょうこ)